
CyberPunk Nightmare

ame*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CyberPunk Nightmare

【Nコード】

N8869E

【作者名】

ame*

【あらすじ】

ブラックホールに陥った意識が見る夢の宇宙、あるいは、サイバーパンクな読むロックンロール。

The Moon Puts A Spell On This City(前)

これらの作品には、ビジュアル&サウンドを施したDHTMLバージョンがあります。

よろしければ、下記URLから入ってご覧ください。

(IE5.5以上、1024×768、midi対応でないと、うまく表示されないかも)

<http://sound.jp/psychovirus-menu.htm>

The Moon Puts A Spell On This City

■ The Moon Puts A Spell On This City ■

Are you ready?

Are you ready to rock on?

俺たちにとって、何ともおあつらえ向きの夜だ

そう、今夜は火星蝕

宇宙の波動も味方してる

暗赤色の夜のなか freeway を抜けて

迷走する時間のイルミネーションにナビゲートされ

地上にぶちまけられた electric の銀河へ潜り込む

ようこそ！天国に仮装したきらびやかな地獄へ

際限なく子供たちを飲み込んで咀嚼しつづける巨大な rave

だけど歪ませた空間のバリアーに阻まれて

誰も都市の輝く核に入り込めない

Keep on dancin'.

一度眠ってしまったらもう目覚めることはできないという

誰もが疑問を持つことさえない強迫観念

そのけっして引き剥がすことができない

意識の拘束衣に包まれたまま

Keep on dancin'.

果てのない夜に Keep on dancin'.

胸まで涎をたらしながら

見えない権力がメディアにばらまかせるパンとサーカスに
大きく両手を広げる半透明の群集
K h a o s の子供たちは化石の表情のまま
やがて来るハメルンの笛吹きを待っている

A r e y o u r e a d y ?

A r e y o u r e a d y t o r o c k o n ?

不吉な t o n e のディスティションをかけたギターのリフが
すべてのマインドコントロールを無効にする

両性具有のボーカリストが歌い始める時

不良少年たちのためのスペース・オペラの幕が開く

脳が酸欠状態になるまで p o g o を続けるんだ

意識の中の毛細血管がばらばらに引き千切られて

やがて世界は血塗れになる

さあ B a b y 出かけよう

銀色の夜の密度の中

C y b e r R o c k 、 n R o l l e r が分泌させる

脳内麻薬物質の加速度に身を委ね

今夜こそあのボーダーラインを超えて

世界の秘密を盗み出すために

A r e y o u r e a d y ?

A r e y o u r e a d y t o r o c k o n ?

Planet Doll

■ Planet Doll ■

粘膜で覆われた惑星で生まれたPLANET DOLL

きみはとつてもFRAGILE

沈黙に押し潰され、壊れてしまわないために

ケータイで無意味な会話をしゃべり続ける

意識の内側で増殖する空虚な領域を押しとどめるため

世界のすべてと関わり合おうとしてる

人工の被膜で覆われたPLANET DOLL

でも内臓と精神のなかで膿は重たく澱んでいる

いつも揮発性の溶剤に似たフェロモンを散布して歩く

鏡の中のきみは幼児の頃からずっと老婆だ

だから頻繁にメイクを塗り重ねる

自分の意識からもそれが見えなくなるように

Glowin' up in so sad family

Clear of all reality

kitchen drinkerの母親と

workaholicの父親は無視して出かけよう

DISITAL MOTHERが子宮のfactoryから配送し

てくれる

発泡スチロールの容器に入ったヌードルを食べ

CYBER DADDYが建造したGameWorld-City

のなかを

イミテーションのステップで彷徨よえば

きつとplasticなカタルシスに包まれる

薬物で開いた瞳孔のPLANET DOLL

なかと外との区別がつかないTVの画面の世界

ニユースとメロドラマには境界線がない

やつと曰ごろの願いが叶い

きみは確実に向こう側の存在になれそうだ

ぬめった魚類のリビドーを凝集させた愛用のナイフで

ストーリーはきみの人生をリセットする

そして、きみの死体を宅配便で送る

ダンボールの箱に”FRAGILE!”のシールを貼って

たぶん、その荷物は宛先不明のまま

配送センターのコンベアの上を回り続けるのだ

粘膜で覆われた惑星で生まれたPLANET DOLL

きみはとってもFRAGILE

粘膜で覆われた惑星で生まれたPLANET DOLL

粘膜で覆われた惑星で生まれたPLANET DOLL

Subliminal Diver

■ Subliminal Diver ■

メタリック・ブルーの夜から

紡ぎ出される鈍い眠り

その無数の繊維の

蠕動のなすがままに

粘性の澱んだ

まどろみの中に降下していく

I、m a s u b l i m i n a l d i v e r

強まっていく眠気の水圧が

脳髓を締め付ける

無限の深みから湧き上がってくる無数の気泡

色彩が踊るその表面は

輪廻を超えて見つづける夢のスクリーン

投げ込まれた無意識の深奥に

どこまでも降りていく錘を追いかけて

I、m a s u b l i m i n a l d i v e r

いつか見た夢の破片

夢の中の風の匂い

輪郭はなく不定形で

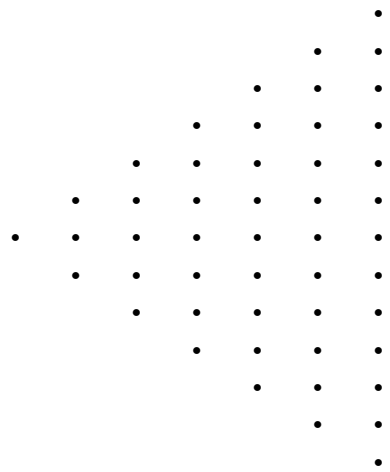
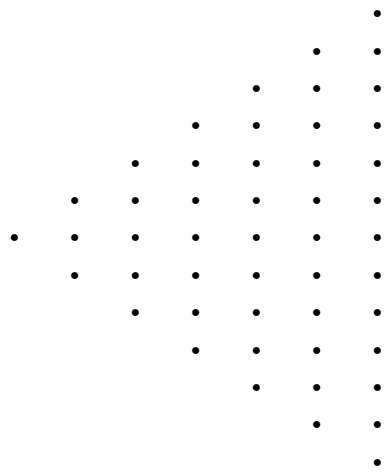
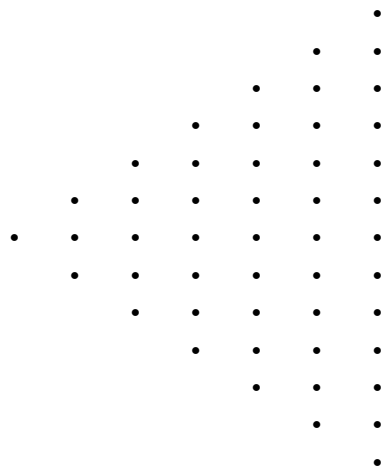
脈絡も不確かな

そのストーリーを緩やかに辿り

世界のいちばん深いところへ降りていく

世界のいちばん深いところへ降りていく

世界のいちばん深いところへ降りていく



DESTRUCTIVE

■ DESTRUCTIVE ■

自動腐食装置は子供たちの口腔に

Acid Jellyを頼張らせながら増殖しつつける

微温い唾液にまみれ

感覚の裏側に偽足を這わせる共同体の集合的無意識

あなたたちは所詮はそのマリオネット

世界経済のラビリンスの奥にある

ハードディスクに記憶させた貨幣単位で

自己拡張幻想を満足させようとしているけれど

ここで歴史は突然のGAME OVER

おまけにフリーズまで起こしちゃってる

Farewell elite

We are DELETE

世界中のtrash boxをぶちまけて歩く

子供たちの頭蓋に押し込んだ注射針

異臭を放つ蛍光色の脳漿を抜き出す

Mad Scientistのlaboratory

結晶化して抽出されたショック・ピンクの憎悪を

超高度市場社会に捧げる供物に捏造する

情報の自動孵化factory

Farewell elite

We are DELETE

自己愛的でしかない selfish な高度管理システムに
見放された時、鬱状態に嵌まり込んで
幻想が交付した不可視のカードは所詮 Illusion
惑星をラッピングする電子のネットに棲息するカジノは
勝手に自分で生殖する快樂を追っていく
そしてあなたたちは無限に向かって堕ちつつづける飛び降り自殺者

F a r e w e l l e l i t e
W e a r e D E L E T E

飽和状態の破壊衝動が臨界値を超えて
秩序の重力崩壊が世界に滲み出て行く

F a r e w e l l e l i t e
W e a r e D E L E T E

F a r e w e l l e l i t e
W e a r e D E L E T E

W e S h a l l D E L E T E ! !

F A D E O U T E R

■ F A D E O U T E R ■

F A D E O U T E R

時間と空間との歪みに生じた擬似生命
地球上のあらゆる場所に浮遊している
見かけは普通の人類と変わらないけれど
その核に輪廻する意識体をもっていない

かれらはF A D E O U T E R

生体エネルギーのvampire

かれらの存在のすべてである波動は

しだいに減衰し、消滅してしまう

焦燥感を増幅し過飽和な分裂に駆りたてる

深層からの無機的なカウント・ダウン

彼も、そして彼女もF A D E O U T E R

顔に癒着している同じ形状の仮面

いつも体温に囲まれる事だけを考え

あらゆる人間の営みに憑依して

過剰に自意識を肥大させて抵抗しても

ただ世界から滑落していくしかないのに

あなたはF A D E O U T E R ?

A City of World's End

■ A City of World's End ■

僕はかつてよく旅に出たものだ

それまで住んでいたところを離れてあちこちさすらった
それはあなたたちが想像するほどたいへんな事じゃない
だってちよつとドアを開けて出て行っただけの話だから

寂しさを感じたことなんて一度だってなかった

それは一人になって初めてわかる事かもしれないけど

雲や海や砂漠の方が家族や隣人たちや友達より

よっぽど波長が合っていて僕のことを理解してくれる

それに僕が遠くへ行つたと自分で言うのも可笑しな話だよね
いつだって今自分のいる場所が世界の中心でしかないんだから

中古の車が壊れたら乗り捨てて

だけどギターとブルース・ハープは持っていてっただ

どこかの街角でちよつと歌えば

その日のパンとチーズとワインを買っくらの金は手に入る

If you're traveling in a City
of World's End
Remember to a girl who's
once my lover

そうやってかなり長いこと旅を続け

僕は“世界の果て”の都市に辿りついた

どうしてそこが“世界の果て”かと言うと

<超ひも理論>でそれが証明されているからなのだそうです

“世界の果て”の都市の人々もだいたいにおいて一般と変わらない
あなたが授業で習った事を忘れてなければ
多くの人間たちの生存には酸素や栄養と共に
ジェラシーや差別が不可欠なのがわかるはずだ
アイデンティティーにそれらを供給し続けないと
自分の実体が消失してしまう恐怖
それは1秒たりとも人々の頭を離れる事がない

If you're travelin' in a City
of WORLD's END
Remember me to a girl who's o
nce my lover

“世界の果て”の都市の海原を見晴らせる丘に
僕は“世界の果て”の少女と並んで座った

冬は終わりに近づいて凍てた大気の中でも光は力を取り戻し始めて
いる

彼女が髪をかき上げるのを僕も手伝った

枯草のような感触と香りだったけれどその時はそれを悪くは感じな
かった

彼女は側頭部のケロイド化した手術痕を僕に見せて言った

「*SOCIETY*がここに<端末>を埋めこんだの」

「この都市の市民はみんな<端末>を埋め込まれているわ
でもその事に気づいているのは私だけみたい
たぶん私にだけは<端末>の取り付け方が不完全だったのね
だからあなたをここに引き止めようとはしないの
世界中からたくさんの人たちがやって来て

ここから出て行った人はいないのだけねど」

「でも私も基本的には<端末>のコントロールに従ってただ漠然と時間を消費して暮らしていくでしょう

友達ととりとめもなく長い会話を続けたり

髪を長くしたり短くしたりその日の食事のメニューを考えたりアニメスを誰かに投影して結局は失望したり

それでもその男との馴れ合いの生活をずうっと続けていたりねそして年老いて死んだら火葬されて

白い骨とインディケーターが点滅しつづける<端末>が残るのだわ」

“世界の果て”の都市の少女はずっと水平線を見つめていた

If you're traveling in a City
of WORLD's END
Remember to a girl who's
once my lover

いつのことからかもう僕は旅に出なくなった

世界はどこまで行っても均質なことに気づいたからだ

でも例えば陽光と微風のやわらかさに包まれたりすると

そんな時ふとあの少女のことを想って

身体のなかを哀しい微電流が走り抜けたりする

そういうことがあると僕はしばらくそれに身をまかせているが

いつの間にかすべては不確かであやふやなものに変質していて

未来の記憶とか妄想のようにしか思えなくなっているのだ

A n g e l s p h e r e

■ A n g e l s p h e r e ■

夜がこの世界の底に沈殿して
あらゆるものを密封している
でもぼくはすべての外界を閉ざして
穏やかで心地よい
天使圏の音楽を聴いている

天使圏で待っていて
天使圏で待っていて
天使圏で待っていて

雲海を突き抜け
世界樹よりも高み
天球の階層をいくつも超えて
星たちの邂逅のように
あなたと出会う

すべての記憶から自由になって
あらゆる質量からの重力を拒絶して

天使圏で待っていて
天使圏で待っていて
天使圏で待っていて

時間の始まりのときから
光源をもたない光のなかにいるあなたは

本当はぼくなのかも知れないけれど

天使圏で待っていて

天使圏で待っていて

天使圏で待っていて

waitin' for the time

■ waitin' for the time ■

COSMIC - WILD - CHILDのメタモルフォシスが始まる
たぶん今度はその最終段階だ brand - newな知性体は幼
年期に孤独を食べて育ってきた それは多くの人類には恐怖の対象
でしかない限りなく絶望的な毒物だが かれにとってはよく冷えた、
まろやかでデリシャスな solitude 掌で弄ぶ玩具は世界の
破滅 でも淋しい旧人類は内部にある底無しの空虚を充填する無駄
な試みで忙しい 宇宙空間には愛が高密度で充満しているというの
に かれは感情移入をしてみてもまったく不毛なことを熟知してい
るから ただ惑星の上の滅びていくしかないものたちを twilight
ght zoneの向こう側で観察しているだけだ 卵型の磁界に
包まれたCOSMIC - WILD - CHILD あざやかな色彩が
踊るディスプレイの前で 意識を宇宙のあらゆる領域にまで拡張さ
せる それは時間の終焉に知性体が到達した究極の瞑想体系 psy
chic - netのブラウザでアカシック・レコードにアクセス
する時 かれの高純度な二ヒリズムは凝集度を強めブラックホール
に進化するのを waitin' for the time
.

ナツハ イチバン 死 ニ チカイ

■ ナツハ イチバン 死 ニ チカイ ■

絶え間なく地表を攻撃する夥しい光の微粒子

充満した炎熱が体の中にアルカロイドを吹き込む

世界は放物線を描いて

高みにある太陽の後を追おうとしていた

僕らは手をつないで波打ち際を歩き

けれども粘着性の世界の触手からめとられないために

ミラーグラスの背後でひたすら沈黙した

ひよっとしたら僕らが世界の背後に廻り込んで

その巨大な宇宙的悪意の裏をかけるという錯覚

もう一人の自分は冷ややかにそれを見ている

積乱雲がめぐるしく形を変えながら

僕らを催眠状態に入れようとしている

夏はいちばん<死>に近い

僕らの意識も肉体も行為もそして視界もすべて

生まれる遙か以前から悲劇に感染している

音楽的な配列をしたテトラポッドの森を抜けたところで

DNAに叛乱することなどできないわよと眼球の奥でしゃべりながら

きみは僕の腕のなかであまりにも普通の人類に萎んでいく

僕は離人症の精神レベルでやさしく絞殺されながら

無限の距離に視線の焦点を合わせる訓練を続け

やがて深いブルーのむこうに

確かに暗黒の姿をみとめたように思う

汗が空気と混じり合っついていやなにおいに変わっていく

時間はほとんど猶予を与えずにすべてを劣化させる

夏はいちばん<死>に近い

STARWIND

■ STARWIND ■

第3の衛星が燐光を発しながら地平に沈んで行く
廃星の表面は風紋を描く鉄錆色の砂が覆っていて
時間の座標を超えて現れる蜃気楼の下で
きみは自分が悲しい生物に生まれてきたことを感じる

26世紀のルビー・チューズデイが歌っている
この世界にはアプリアリなものなど存在しないわ
人間たちが魚類のように産卵しつづける幻想を別にしたら
この銀河のどこに悲しみなんかが存在するといふの？

だからきみは漂っていくことを選択するだけだ
リアリティーの彼方へ STARWINDに乗って

アドルフ・ヒトラーが探し求めた地球内部の空洞では
複数の人格をもつ夢が人工冬眠を続け
影の世界にまで連続しているその触手が伸び
きみの感じやすい意識の底部を微かに刺激する

すべてはこの時空よりいくつも上の階層にいる何かが
自閉的なまどろみのなかで見ている夢に違いない
けれどもきみはプラズマを纏ったシャーマンに導かれて
多層宇宙の地下世界深くにあるDREAMTIMEへ

そしてきみは漂っていくことを選択するだけだ
リアリティーの彼方へ STARWINDに乗って

きみの不要な存在の細片が体表からしだいに剥落して
空間に長い航跡を残し やがて散乱していく
すべてが飛び散った時 そこはリアリティーの彼方

S T A R W I N Dに乗って

S T A R W I N Dに乗って

S T A R W I N Dに乗って

GODLESS

■ GODLESS ■

+++++ 迷宮のなかの回廊のあちこちにシンクロニティーは、さりげなくちりばめられている。 ■ ■ でも、その向こうでキミがずっと僕を待っていたことは何故か予感から消去されていた。 ■

■ リアルと夢との境界領域に遺棄された都市の中央にある折れ曲がった塔の上で僕らは再会し、やがて、そこでキミの意識の深みにある複合体の逆コンパイルを始める。 +++++

+++ We got our cosmos is GOD

LESS .+++

++ That is a fact; never the less it makes us peaceful.+++

+++++ 少年の日の僕が少女のキミのまだセロファンだった皮膚の下に、タトゥーのように残して来たのは透き通ったゼリー状のトラウマだ。 ■ ■ その時からキミの中の少女性も温度をもたない存在に固着したままスキンヘッドの幽体として高濃度のまどろみのうちに空中浮揚をつづけている。 ■ ■ キミの母胎から現在まで続く航跡を僕はゆつくりと舌でなぞっていく、それはキミのすべてのエラーメッセージを癒すこと、それがこの世界でぼくが受け入れた、たったひとつだけの義務だから。 +++++

+++ We got our cosmos is GOD

LESS .+++

++ That is a fact; never the less it makes us peaceful.+++

+++++ 放置されているジグソーパズルの失われたピースはキミの意識の深みに隠されている。 ■ ■ シャーマンは未来の果てから時間を逆行しながらトランスの中で空想上の動物のダンスを踊り続け、いともたやすくそこに入って行く。 ■ ■ ファイルをイメージするファイル、ファイルを生成しつづけるファイル、キミも僕もそして二人が紡ぎ続ける何かも、この世界のあらゆるものはファイルだ。 ■ ■ だから削除のコマンドにより一瞬にして何の痕跡を残すこともなく消え去り、その時そこには苦痛も悲しみも一切存在しない。 ■ ■ 宇宙の始まりと終わりが変換される虚数座標のポイントで、僕とキミはひび割れた世界卵の磁気記憶に組み込まれた。 ■ ■ そして永遠の無言に充たされた至福はただ存在し続ける。 +++++

++++ We got our cosmos is GOD
LESS .+++
++++ That is a fact; never the
less it makes us peaceful.+++

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8869e/>

CyberPunk Nightmare

2010年10月9日11時52分発行